

# 自己心理学における「自己の主観的な現れとその変遷」の 図的な概観の一試み

池田 大海

杏林大学保健学部臨床心理学科4年

## 問題と目的

自己心理学は、Heinz Kohutによって主導され、特に米国では現代も影響力の強い理論である。しかし、内容が不明確でわかりにくい、理論的な整合性が欠落している等の批判が寄せられている。本研究では、文章的な説明を補完しうる図式を用いることで、Kohutの中核的な理論的体系、及び、それに対する指摘や批判の背景を検討する視点を提示することを目的とした。

## 研究手順

自己心理学は、自己愛を内包する「自己の構造」と「自己の主観的な現れとその変遷」の2つに整理される<sup>1)</sup>。Kohutは「自己の構造」を本質的に定義できないもの<sup>2)</sup>としていることから、本研究では扱わなかった。一方の「自己の主観的な現れとその変遷」を、Siegelは「自身の自己対象欲求が、自己対象によって共感的に応じられるような

過程を経て、成長発達してゆくこと」と簡潔かつ専門的に説明している<sup>3)</sup>。これを本研究の対象とした。

Siegelの説明文から、(イ)自己とその発達について、(ロ)自己対象とその質的变化について、(ハ)自己対象欲求とその構造、並びにその質的变化について、(ニ)自己対象体験について、の4命題を抽出した。「自己」「凝集」「自己心理学」「自己対象」「自己対象欲求」「自己対象体験」の6つを検索ワードとし、Google Scholarデータベース及び杏林大学図書館蔵書検索エンジンを用いて文献検索を行った。

検索結果から得られた12文献に加え、Kohutの3原典、並びに研究目的に合致する4一般書籍を検討対象とした。全文献を精読し、命題別に該当箇所を転写・整理した。次に、鈴木・栗津<sup>4)</sup>の取り上げている文章理解の深度に影響を与える図的特徴に留意しながら、命題それぞれに対する図式化を行った。最後に、4つの図式すべてを総合し、互いに矛盾しないように整えた。

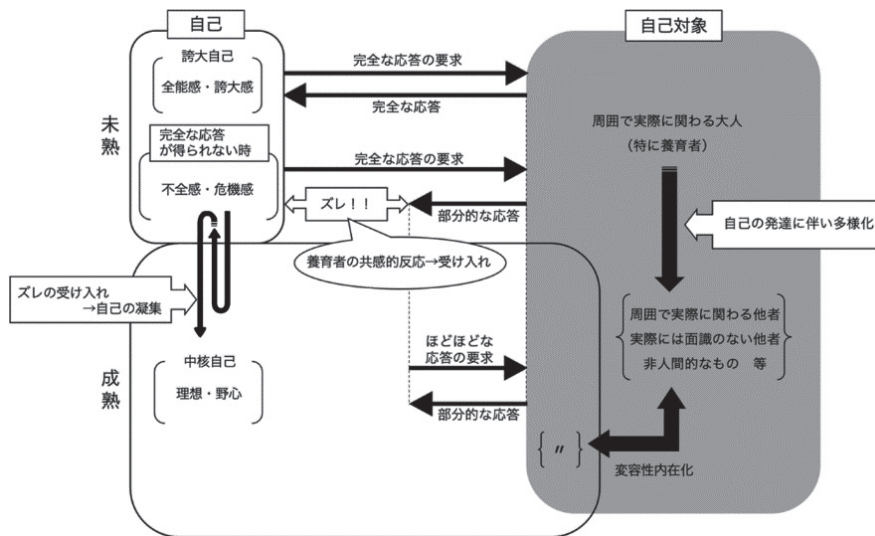


Figure 1 自己の主観的な現れとその変遷について

### 結果と考察

最終的に得られた図式をFigure 1に示す。図式化により、自己の変遷の中で自己と自己対象の関係が<sup>1)</sup>質的に変化していること<sup>2)</sup>、経済的に関係し合っていること、が視覚的に示された。この2点が初学者の理解を困難にしているとの推測に立てば、図式化は理解促進につながると言えるだろう (Figure 1)。

### 今後の課題

より信頼のおける参照先となるため、図解の精度を高めること、周辺概念に関しての図的概観に取り組みたい。

### さいごに

学生リサーチ賞受賞に預かり、身に余る光栄に存じます。

ご指導,ご助言を頂きました,臨床心理学科の橋本望先生,協谷順子先生,櫻井未央先生,並びに学習院大学の北山純先生に,深謝申し上げます。

### 参考文献

- 1) Wolf, E.S. : TREATING THE SELF : Elements of Clinical Self Psychology US : The Guilford Press. 1988. (安村直己, 角田豊訳 : 新装版 自己心理学入門. コ福特理論の実践. 金剛出版. 2016.)
- 2) Kohut, H. : The restoration of the self. New York, International Universities Press. 1977. (本城秀次, 笠原嘉監訳 : 自己の修復. みすず書房. 1995.)
- 3) Siegel, A. M. : Heinz Kohut and the psychology of the self. Routledge. 1996. (岡秀樹訳 : コ福特を読む. 金剛出版. 2016.)
- 4) 鈴木明夫, 栗津俊二 : 文章理解を促進する図解についての認知心理学的研究. 城西人文研究, 29. 2006. p51-67.